て生きていくしか術はない。啄木は、明治の文豪が見落した「交通事故」という問題、現代の誤謬をいち早く捉え、高い時限で芸術化することに成功している。明治時代に、人類が生み出し、自らに荷し、未解決のまま放置している現代社会最大の病理命題を、美事に予測し謝当てた。

啄木の文学世界には、科学文明社会の危機を予感した『青地君』「夏の街の恐怖」「騎馬の巡査」と、もうひとつ、科学文明による新時代到来の憧憬を歌った最終詩「飛行機」がある。対極的なところに位置する作品と言えようが、時代の超越という意味で、新たな、別の意味での先駆性を証明するものとなるであろう。

註

(1)日記明治四十一年十月六日には〈〝青地君〟と云ふ題だけ書いて、十枚も紙をしくじつた〉とある。
日記明治四十一年十月七日には〈〝青地君〟を書き出した。寝るまでに七枚。曇つて、頭の重い日だが案外に筆が進んだ〉とある。
日記明治四十一年十月八日には〈〝青地君〟を十七枚目まで書いた〉とある。
日記明治四十一年十月九日には〈〝青地君〟二十一枚目まで書いた時、午後三時半、与謝野氏と平野君がやつて来た〉とある。

(2)『釧路駅史』(昭和六十一年十一月一日、釧路駅史編纂委員会)

(3)木股知史『石川啄木・一九〇九年』(昭和五十九年十二月二十八日双文社)の指摘による。

(4)日記明治四十一年一月二十六日には〈今日は日曜日。朝社長からの使いがあつて、行くと、昨日あたりから新聞の体裁が別になつたと云つて大喜び。五円と銀側時計貰つた〉とある。

(5)日記明治四十一年七月二十七日。

(6)平岡敏夫『日露戦争文学の研究』(昭和六十年五月二十日有精堂)

(7)平岡敏夫「日露戦後の啄木――閉塞感覚の形成」(上田博等編『悲しき玩具』平成六年四月十日世界思想社所収)

(8)平岡敏夫前掲著書の指摘による。

(9)註(8)に同じ。

(10)小川武敏「国際啄木学会東京支部会報創刊号」(平成三年四月十三日)の示唆による。

(11)村野四郎「啄木の詩について」(昭和三十三年四月号『国文学』至文堂)

(12)小川武敏『石川啄木』(平成元年九月九日武蔵野書房)参照。

(13)参考文献
○『東京文学地図』(都市出版)
○『東京案内』(明治文献)
○『明治大正図誌』(筑摩書房)
○『実測改正最新東京全図』(古地図史料出版株式会社)
○『日本世相百年史』(東京日日新聞社)

(本稿は国際啄木学会、平成五年七月二十四日、二十五日、北海道大会に於ける研究発表の一部、「啄木と釧路――「病院の窓」の世界」に加筆したものである)

龍閑川の分岐點たる龍閑橋より外濠に沿ひ、錦町三丁目より北折して御茶水橋に達する線あり。又外濠に沿ひて麹町區より來る官有鐵道中央東線の電車あり

ということである。須田町は、品川上野線、三田両国線、九段本郷線、外濠線、中央東線の各線が入っている激しい乗換場であった。因に東京の入口は、明治十年頃の人力車と乗合馬車のときは六十万人程度で、二十六年の馬車鉄道が開通したときは八十六万人を越え、三十六年の電車開通のときは約百八十万人となっている。電車の導入は、資本主義産業の発展による二百万都市の時代の幕開けで、市内電車の繁栄は、大都市東京の形成と結びついている。(13)

○

前掲著書で平岡敏夫は、大正期に入って志賀直哉が、この問題を素材に、小説三編『正義派』『出来事』『城の崎にて』を書いていることを指摘している。最初の『正義派』の主題は、事故の証言で正義を貫いた後の〈空々しい〉気分で、次の『出来事』は、子供が事故を免れ救出されたことによる〈快い〉興奮である。その後に志賀直哉自身が、山の手線に撥ねられ、城の崎温泉で療養し、名作『城の崎にて』を書いたのだが、これは周知のように死に直面したものの心理を描いた小説である。このテーマで志賀直哉は創作し、自らも事故に出あったが、優れてはいるものの個人的な心理小説としてしか形象化できなかった。『釧路新聞』の記事から「騎馬の巡査」までは約二年、啄木は意識していたかどうかはわからないが、自己の内部で「轢死事故」を熟成し、単なる「列車自殺」から「交通事故」へと昇華させ、大きな今日的テーマを獲得した。これは、日常の出来事を中心に創作する私小説家や心境小説家と、個人的な体験でも社会問題として普遍化することの出来る社会派作家との差である。それらはまた、作家に内在する新鮮な感覚と想像力と社会意識に依拠すると言えよう。

繰り返すことになるが、小説草稿『青地君』は先例があったとは言え、やはり描写は優れており、動機の〈故意か過失か〉は重要である。次の「夏の街の恐怖」は、明らかに「電車人身事故」の恐怖で、そして「騎馬の巡査」は、犬ではあるが、否、犬だからこそ、正に「自殺」ではなく「交通事故」なのである。それらの詩は〈列車〉〈汽車〉でなく〈電車〉であるところに大いに注目したい。概して「飛び込み自殺」は「汽車」であるが、「交通事故」は都市の象徴である「路面電車」の発達普及によるであろう。

それは国木田独歩の言うように、現実の苦しみに耐え切れず、自らの命をたつ自殺者の心を思えば胸も傷む。しかし、幸せな日常生活を、相方ともに一瞬にして破壊してしまう今日の交通事故は、より悲惨な現実である。交通事故は事故と言われているが、或る意味に於いて、事故ではない。人類は、自らの科学文明が生んだ交通事故という新しい難題に何の解決策も持たない。人々は、無責任な資本主義に対して、ただ「考えない」「非業の死への不感症」となっ

〈いかめしく髯を……〉」「騎馬の巡査」があることを指摘し、詩の推敲過程を綿密に分析し、作者の意図を解明する試みをおこなっている。この三編を比較すると、第一稿とみられる「無題〈いかめしく髯を…〉」には、須田町という地名はなく、第二稿と思われる「騎馬の巡査」になって挿入されている。また第一、第二稿には、最終連の〈犬が電車に轢かれた〉はなく、発表稿によって付け加わえられたことがわかる。啄木の意識の深淵に沈んでいた「列車事故」が、創作の最終的段階で、突然に甦ってきたとでも言えようか。この一連を付け加えることによって「騎馬の巡査」は、ぎりぎりのところで不朽の名作になることができたであろう。

いずれにしても「雪中行」の旭川の風景と「騎馬の巡査」とが共通するということは、東京に於ける啄木の文学活動は、内在化した北海道と現実の東京生活が、交錯してなされていると考えられる。別言すれば、『釧路新聞』の記事と北海道を舞台とした『青地君』は、東京での文学環境と犬の事故の目撃を媒介として、「夏の街の恐怖」「騎馬の巡査」となって確立したということである。もうひとつ、藤村の小説『破戒』の一場面に、そのまま詩「初恋」が出てくるが、ひとりの作者にあって小説と詩がオーバーラップすることはありうる。啄木の場合も、『青地君』の事故現場の描写という小説の一断片は、新しい口語自由詩『心の姿の研究』を生む礎となったと思われる。村野四郎は、このような詩が生まれた背景を〈文語派〉を破った〈瞬間の衝撃〉と述べていたが、突然に秀作が出来るわけはなく、やはり小説執筆の努力が、口語自由詩を完成させたと見たい。

二二

ここで再び確認しておきたいが、啄木の事故は〈列車〉〈汽車〉ではなく〈電車〉となっており、「騎馬の巡査」は、大都会の風景を描いたものであった。少し社会背景に触れれば、日本で最初に電車が走ったのは明治二十八年で、京都電気鉄道による七条停車場前～伏見町油掛間である。東京は十年近く遅れた明治三十六年に、旧馬車鉄道会社が、東京電車鉄道株式会社となり、品川～新橋間、ついで新橋～上野間を運転開始した。同年に東京市街鉄道鉄道株式会社も数寄屋橋～神田間、次に日比谷～半蔵門間などを開業した。翌年には、東京電気鉄道株式会社も外濠線のうち土橋～御茶の水間を営業する。明治三十九年三月二十日の啄木の日記には〈電車賃引上反対市民大会が二度開かれた。一千有余の群集が、決議文を朗読してから、市役所に推しかけ、街鉄の本社に石を投じ、昨年九月の騒擾を再現しかねまじき勢であつた〉とある。このようなストライキを重ねて鉄道三社は、明治三十九年九月に統合して東京鉄道株式会社となった。その後の電車は、発展の一途を辿って市民の確実な足となり、明治四十四年八月に東京市に買収移管され市電となった。神田須田町は、神田川に架けられた万世橋に近い十字街で、日本橋から上野や本郷、神田から上野を往来する明治の東京を代表する交通の要所であった。市内電車は『東京案内』（明治文献）によれば、

神田橋より小川町、須田町を經て、柳原通を富松町に至る線あり。俎橋より小川町須田町を經て、宮本町に至る線あり。日本橋區界今川橋より須田町を經て、五軒町に至る線あり。外濠

肥つた三歳ばかりの男の児が
ちよこ〳〵と電車線路へ歩いて行く。

この詩を表現の側から見ると、生活の場面を一行一行断片的に並べ立て、同種の雰囲気を醸し出しイメージ化していく方法で、一連と四連のリフレインは、形で鉄道の線路を現わしたものであろう。テーマは、平凡で倦怠的な日常生活に影から忍び寄る危機である。

この詩では事故は起きていないが、背景には電車事故があり、「夏の街」に於ける「恐怖」とは、刻一刻と迫ってくる電車、それによる電車人身事故という交通事故の恐怖である。子供は轢かれてはいないし轢き裂かれた肉体などはないが、ここに『青地君』の描写を付け加わえ、事故後の現場と母の姿を想像すれば、強烈な詩的世界ができあがる。村野氏が、詩人の直観によって鑑賞した〈すざまじい詩的現実〉〈異常な生ま生ましい現実感〉は、「事ありげな春の夕暮」より、むしろ「夏の街の恐怖」によく当てはまると思われる。

続いて明治四十三年一月十三日に、同じ『東京毎日新聞』に、詩「騎馬の巡査」を発表しているが、これは『心の姿の研究』に入れてもよいような詩風の作品である。

絶間なく動いてゐる須田町の人込の中に、
絶間なく目を配つて、立つてゐる騎馬の巡査――
見すぼらしい銅像のやうな――。
白痴の小僧は馬の腹をすばしこく潜りぬけ、
荷を積み重ねた赤い自動車が
その鼻先を行く。
数ある往来の人の中には
子供の手を曳いた巡査の妻もあり
実家へ金借りに行つた帰り途、
ふと此の馬上の人を見上げて、
おのが夫の勤労を思ふ。
あ、犬が電車に轢かれた――
ぞろ〳〵と人が集まる。
巡査も馬を進める……

この詩は、ほぼ「夏の街の恐怖」と同様の表現方法によって、東京の須田町の人ごみに立つ巡査と行き交う人々や自動車及び電車という都会の風景を描いている。ところが、この舞台は、須田町とはいうものの、素材は、人ごみ、巡査、妻（女）、犬であり、全体的な風景は前出の「雪中行」第二信に於ける旭川の交差点の風景と一致している。異なる点は、最後の連〈あ、犬が電車に轢かれた――／ぞろ〳〵と人が集まる／巡査も馬を進める……〉のみである。この「騎馬の巡査」の詩については、小川武敏の研究[12]があり、そこで詩稿ノートには、発表された「騎馬の巡査」の前段階として「無題

木の創作活動に味方してくれたとしか思えない。

この事故の目撃からさらに半年後、明治四十二年十二月から二十日にかけて、啄木は『東京毎日新聞』に、詩編『心の姿の研究』を発表した。この詩編は、村野四郎の「啄木の詩について」[11]によって高く評価され、知られるようになった作品である。その中で村野氏は、二つの詩「夏の街の恐怖」「事ありげな春の夕暮」を取り上げ、特に後者を〈悪感と戦慄の異常な危機感は、そうした切迫した社会情勢を反映して、すさまじい詩的現実感をもりあげている〉〈異常に生ま生ましい現実感をもって、理由なくわれわれに迫る〉と鑑賞している。つまり「事ありげな春の夕暮」に、大逆事件発覚直前の〈切迫した社会情勢〉の反映を読むのである。そして、このような詩が出来た理由については、表現の側から〈敢然として文語脈を破って飛びこんだ瞬間の衝撃が、彼に本当の姿を開示した〉とだけ説明している。この村野氏以外でも、再三、今井泰子が「事ありげな春の夕暮」を論じているが、この作品と「夏の街の恐怖」を初めて読んだとき、予てより、長い間、純粋な詩として鑑賞した場合は「夏の街の恐怖」のほうが優れていると思われてならなかった。

「夏の街の恐怖」は、焼けつくような夏の暑い日に、子供が、うっかり居睡りをした母親の手から離れ、電車線路に這い出していくというものである。

焼けつくやうな夏の日の下に
おびえてぎらつく軌条の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて
肥つた三歳ばかりの男の児が
ちよこ〳〵と電車線路へ歩いて行く。

八百屋の店には萎えた野菜。
病院の窓の窓掛は垂れて動かず。
閉された幼稚園の鉄の門の下には
耳の長い白犬が寝そべり、
すべて、限りもない明るさの中に
どこともなく、芥子の花が死落ち
生木の棺に裂罅の入る夏の空気のなやましさ。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、
骨折れた蝙蝠傘をさしかけて門を出れば、
横町の下宿から出て進み来る、
夏の恐怖に物も言はぬ脚気患者の葬りの列。
それを見て辻の巡査は出かゝつた欠伸噛みしめ、
白犬は思ふさまのびをして
塵溜の蔭に行く。

焼けつくやうな夏の日の下に、
おびえてぎらつく軌条の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて

これらの小説を啄木は読んでいると思われるが、『青地君』と『蛇窪の踏切』『窮死』『三四郎』を比較分析すると、複雑な関係によって成り立っていることがわかる。『蛇窪の踏切』は、轢死する女子学生の心理や状況が克明で悲惨さが強調されているが、事故現場の描写そのものはない。『窮死』は、若い女性でなく風来坊であることや、轢き裂かれた無惨な肉体と現場の模様など、描写から文章の構成に至るまで『青地君』とは、全く共通している。密かに啄木が敬愛していた独歩であり、作品の結びつきは強いと考えられるが、しかし、独歩自身は自殺者の心理に主眼があった。『三四郎』は、肉体の描写や死人の面影など共通点がないわけではないが、全体的な構成は余り類似しているとは思えない。だが『三四郎』が発表された直後に、『青地君』が書き出されていることから、極く直接的な動機になったことは確実であろう。また漱石は、科学文明によって害される人間生活や生命と、それらに冷静でいられる科学者の心理を皮肉るという科学文明批判をおこなっているところは意味深い。つまり、『蛇窪の踏切』『窮死』『三四郎』などは「轢死」に違いないが、正確に言えば「鉄道飛び込み自殺」の小説である。日常生活で起きた新奇な事件を小説化することは、近世の「心中物」などにあったことで珍しくはない。ただ単に、社会的な事件を描いただけでは、妥当性は持ち得るであろうが普遍的な芸術とはなりにくい。その点で漱石が、轢死自殺ではあるが「轢死」を科学文明批評に繋げたことは一歩踏み込んでいると言える。確かに、釧路新聞の記事は「鉄道飛び込み自殺未遂」で、啄木も東京の生活が困窮したとき鉄道自殺を考えたりもした。しかし、上京して間もなく書いた小説『天鵞絨』では、既に主人公お定に、列車が踏み切りを通過するときの恐怖心を事細かに語らせてもいる。そして『青地君』に於ける青地常象の無惨な死は〈故意か過失か、僕には青地君自身の性格の解らなかつた如く、解りかねる〉となっていた。先の機関士自身の〈故意に飛び込んだのらしい〉という証言と、医者による〈大分酩酊してゐた事は明か〉という切り返しには、奥ゆきの深いものがある。この〈故意〉〈過失〉の差違は、文学テーマとしては大きい。

○

『青地君』の執筆を中絶してから約半年後の明治四十二年三月三十日に（日記）、啄木は『鳥影』の原稿を突き返された帰り道、こんな出来事に街であっている。[10]

面当に死んでくれようか！　そんな自暴な考を起して出ると、すぐ前で電車線に人だかりがしてゐる。犬が轢かれて生々しい血！　血まぶれの頭！　あゝ助つた！　と予は思つてイヤーな気になつた。

実に私生活で、犬が電車に撥ねられて血だらけになったが辛くも命だけは助かったというところを目撃したのである。このような場面に直接出あうことは現代でも少なく、偶然の神秘が、苦闘する啄

或日大久保へ歸る途中に悲慘なる轢死者の最後を目擊して、歸途余は彼の心事を思ひて、ホロ〳〵と泣きながら家に歸れり。其時の感想を材料として、自殺者の餘儀なき運命を描きたるが卽ち『窮死』一篇なり。筆を執つても余は泣きつゝ書けり。

この『病床録』によると独歩は、轢死の現場を目撃しており、日常生活で出あった衝撃的な事故が『窮死』の素材となっていると知れるが、そればかりでなく、やはり確実な描写は、新聞記者の経験が根底にあると思われ、優れた構成は一流作家の証であろう。しかし独歩自身は、死を見つめての病床にあったためか、事故現場の描写や轢死の意味より、自殺者の心情に関心が向いていた。

そして漱石の『三四郎』は、そもそも小説の書き出しが列車に始まっており、頻繁に列車が使われてはいるが、轢死事故の場面は前半の一部であり、このようなところを挙げることができよう。

〔汽車〕

三四郎は氣味が惡くなつた。所へ又汽車が遠くから響いて來た。其音が近付いて孟宗藪の下を通るときには、前の列車より倍も高い音を立てゝ過ぎ去つた。座敷の微震がやむ迄は茫然としてゐた三四郎は、石火の如く、先刻の嘆聲と今の列車の響とを、一種の因果で結び付けた。さうして、ぎくんと飛び上がつた。其因果は恐るべきものである。

〔周囲の人々、肉体〕

半町程くると提灯が留つてゐる。人も留つてゐる。人は灯を翳した儘默つてゐる。三四郎は無言で灯の下を見た。下には死骸が半分ある。汽車は右の肩から乳の下を腰の上迄美事に引き千切つて、斜掛の胴を置き去りにして行つたのである。顔は無創である。若い女だ。

〔心理〕

三四郎は其時の心持を未だに覺てゐる。すぐ歸らうとして、踵を回らしかけたが、足がすくんで殆んど動けなかった。

〔面影〕

三四郎の眼の前には、あり〳〵と先刻の女の顔が見える。

この『三四郎』の轢死事故には、集まって来た人々、轢き裂かれた肉体の描写があり、特に主人公三四郎の心理は肌細かい。平岡氏が指摘しているが、『三四郎』の〈右の肩から乳の下を腰の上迄美事に引き千切つて……〉〈眼の前には、あり〳〵と先刻の女の顔が見える〉と、『青地君』の〈両脚が大腿部から失くなって……〉〈眼を瞑れば鮮々と死骸が見える〉とは類似している。また『三四郎』では〈怖い〉〈怖かつたでせう〉が繰り返され、列車という得体の知れない科学文明への恐怖心が強調されている。だが『青地君』とは、轢死者が若い女性である点で異っており、さらに周囲の人々の会話による事故の検証などはなく、全体の構成から受ける印象は独歩ほど近くはない。

この『蛇窪の踏切』は、轢死するまでの心理や周囲の状況が中心で、汽車の無気味さや轢死までの陰鬱さは何如なく発揮されているが、しかし小説は、列車事故が起きる直前で終っており、轢き裂かれた肉体や事故の現場の描写はない。

次の国木田独歩の『窮死』は、女子学生ではなく、孤独な労働者が、人生にやり切れなくなって、最後に新宿赤羽間の鉄道線路で轢死を遂げたというものである。小説の結末部で、轢き裂かれた肉体や事故の検証など現場の様子が描写されている。

〔肉体〕

轢死者は線路の傍に置かれたまゝ薦が被けて有るが頭の一部と足の先だけは出て居た。手が一本ないやうである。頭は血にまみて居た。

〔周囲の人々〕

六人の人がこの周圍をウロ〳〵して居る。高い堤の上に兒守の小娘が二人と職人體の男が一人、無言で見物して居るばかり、四邊には人影がない。前後の雨がカラリと晴つて若草若葉の野は光り輝いて居る。

六人の一人は巡査、一人は醫師、三人は人夫、そして中折帽を冠つて二子の羽織を着た男は村役場の者らしく線路に沿ふて二三間の所を往つ返りつして居る。始終談笑して居るのが巡査と人夫で、醫師はこめかみの邊を兩手で押へて蹲居んで居る。蓋し棺桶の來るのを皆が待つて居るのである。

〔事故の検証〕

『二時の貨物車で轢かれたのでしよう。』と人夫の一人が言つた。

『その時は未だ降つて居たかね?』と巡査が煙草に火を點けながら問ふた。

『降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過ぎでした。』

『そうすると何だナ、矢張死ぬ氣で來たことは來たが晝間は死ねないで夜行つたのだナ。』と巡査は言ひながら疲勞れて上り下り兩線路の間に蹲んだ。

〔最後の場面〕

此時赤羽行の瀘車が朝曦を眞ともに受けて威勢よく駛つて來た。そして火夫も運轉手も乘客も皆な身を乘出して薦の被けてある一物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通り假埋葬の處置を受けた。これが文公の最後であつた。

實に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うにもやりきれなくつて倒れたのである。

ここには、汽車によって轢き裂かれた肉体が、鮮やかに描出されており、また集まって来た人々、巡査、医者、人夫、村役場の者などの会話、それらを通しての事故の検証など、実にリアルに肉体と事故現場の状況が描写されている。後日に独歩は『病床録』(9)（明治四十一年七月十五日）で、次のように語っている。

見水蔭『蛇窪の踏切』と国木田独歩『窮死』、及び明治四十一年九月から十二月まで『朝日新聞』に連載された夏目漱石の『三四郎』のことである。その他でも水野葉舟『霧』（明治四十一年十一月『中学世界』）、野上臼川『崖下の家』（明治四十三年六月『新文芸』）、小川未明『心臓』（明治四十五年七月『早稲田文学』）などに見られると言う。これらの調査から、少なからず当時は「轢死」事件及び「轢死」の小説があったとわかり、『青地君』は、釧路での経験と東京での文学や社会状況が重なり合って執筆されたものと推測される。また平岡敏夫は、別稿の「日露戦後の啄木――閉塞感覚の形成」[7]の一部で、この三つの小説と『青地君』を比較しているが、しかし、ここで今一度、これらを表現と内容の側から分析し、その影響関係と啄木の独自性を考察してみることにする。

前出の女子学生の轢死事件は、明治三十九年五月であったが、その約四ケ月後の九月に夏目漱石は『草枕』[8]で、汽車は〈二十世紀の文明を代表〉しており、現代文明は〈此あぶないで鼻を衝かれる位充満してゐる。おさき眞闇に盲動する汽車はあぶない標本〉と述べている。これらを当然に、江見水蔭は参考にしていると思われるが、『蛇窪の踏切』は、肺病を患った女子学生が、寄留先を追われ嫁いだ姉からも冷たくされ、踏切で自殺するまでを書いた小説である。ここにある主な描写を拾い上げてみる。

〔汽車〕

下り列車が、凄まじい勢ひで走つて來た。つい、眼の先を通るのである。男女の戯れる聲も、老婆と嬶さんとの泣言も、電車の喇叭の音も、汽關製造の鐵槌の音も、皆之に搔き消されて、何の音響も耳に入らぬ。空氣を切つて唸りを發する汽關車が、火の粉をぱら〳〵線路の上に零しながら過ぎると

〔心理〕

此儘斯うして寐て居れば、汽車が來て、自然に轢き殺して呉れるわと考へて、身を轉がして猶軌道の方に近寄り。砂利を避けて、枕木の上に背を宛て、仰向きになつて、一方の軌道に頭を載せ、一方に足を揃へて置いた。

軌道の下の砂利が一個々々數へられて、車輛が垂らして行く油槽に、枕木の處々染つて居るのが、前に幾人となく此所で自殺した者の、其血の名殘かとまで見えるのである。

〔最後の場面〕

汽關車は、上に黑き煙を吹き出し、下に紅き火を蒔き散らし、凄まじい勢ひで來るのである。

露代は急いで小徑から、斜に駈降りた。留度なく線路に走り入つて、軌道に跌いて、砂利の上に倒れた時に、汽關車のパイプから吐き捨てる蒸氣は、ぱツと立つて、下界に白雲の舞下れる、それと見る〳〵、既や、汽車は五六鎖を過ぎて、初めて非常汽笛は鳴らされた。

このように『釧路新聞』の雑報「老人轢死をはかる」と小説草稿『青地君』に類似点は多く驚かされるが、しかし、記事では老人は助かっており、『青地君』にある肝賢の轢き裂かれた肉体と現場の模様の描写そのものはない。そして啄木は、文学や人生を振り返ることの少ない男で、たとえ振り返ったとしても三ケ月程度であるが、この記事から、八、九ケ月後に「青地君」は書かれており、しかも東京に於いて執筆されているという点も納得がいかない。何か東京時代に事件があったのか、引き続き、啄木が上京してから『青地君』着筆までの間について、私生活と文学環境と社会状況の側から調査してみる。

○

明治四十一年四月に単身上京した啄木は、金田一京助の援助を受け、本郷の赤心館に宿を取り、懸命に小説を執筆し売り込みに奔走するが、思うようにならない。七月下旬には[5]、下宿料の滞納で追放されそうになり、居候を頼むつもりで小栗風葉の家を訪ね、さらに北原白秋のところに立ち寄った。帰り道で〈〝放浪〟の悲しみ〉を痛感し、こんなことが心に浮んで来た。

電車が一台、勢ひよく坂を下つて来た。ハツト自分は其前に跳込みたくなつた。然し考へた。自分は自分の歌を書いた扇を持つてゐる。死ぬと、屹度これで自分だといふ事が知れるだらう。

――かくて予は死ななかつた。そして、新聞記者をした事があるだけに、自分の轢死の記事の新聞に載つた体裁などを目に浮べた。

啄木は、切迫する東京の生活で轢死を思ったが、それを記者の経験と記事の体裁が踏みとどまらせたと言う。上京してからも、北海道での記者生活と多分あの記事が脳裏に焼きついて離れず、強く意識し続けるとともに、自分の身に置いても考えるようになったのであろう。

続いて、明治時代の東京の社会状況や文学世界に眼を向けて行くことにするが、この問題について、既に、平岡敏夫が『日露戦争文学の研究（上）』[6]の第一部「三つの轢死」の章で詳細に調査している。

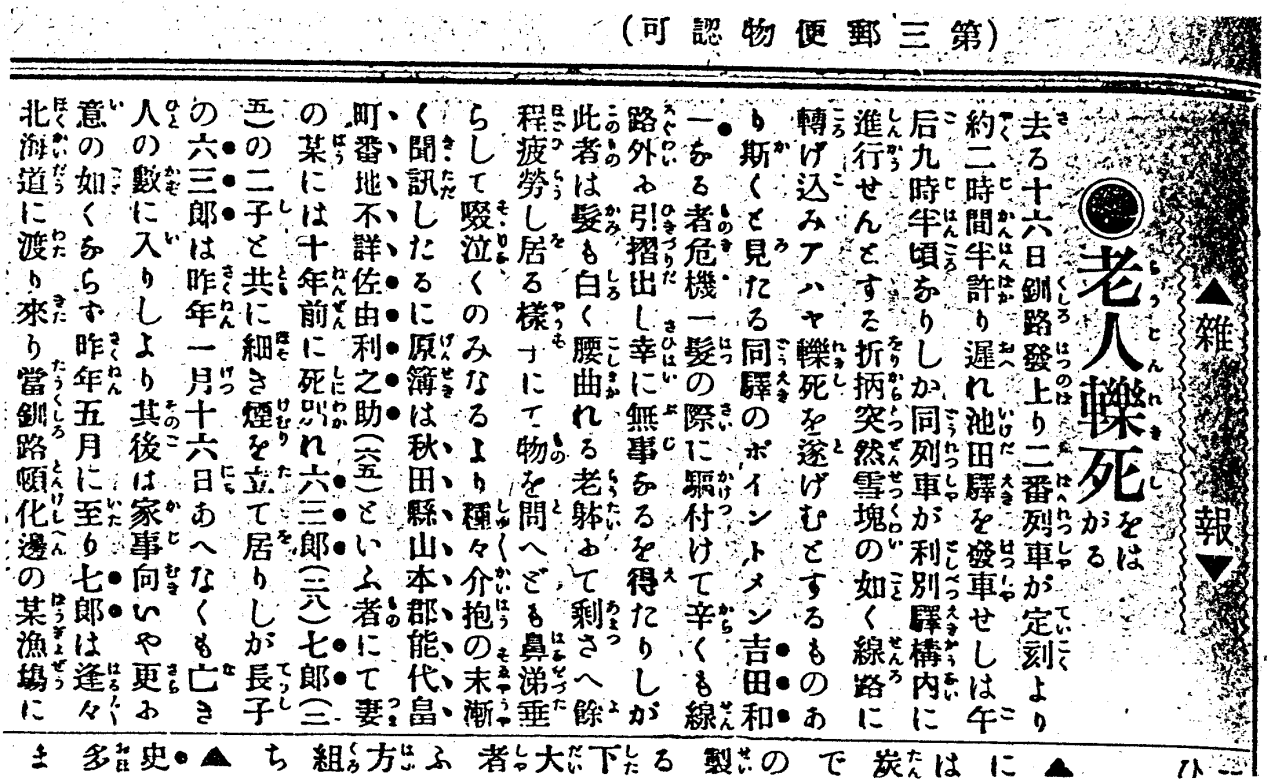
この著書によると、日露戦争後の明治三十九年三月三十一日に、鉄道国有法が公布され鉄道は整備されるが、戦争の影響もあって鉄道自殺者が増加した。明治三十五年に五百二十八人であった鉄道自殺者が、四十年には二倍近くの九百九十四人となり、以後も漸増していく。また、この頃の具体的な事件としては、明治三十九年五月二十一日の『朝日新聞』『東京日日新聞』に、大崎発の赤羽行き列車に、女子学生が飛び込み無惨な死を遂げた、と大々的に報じられていることなどを指摘している。明治四十年前後は、列車が一般化され、様々な面で脚光を浴びたときであったらしい。

平岡氏が取り上げた「三つの轢死」の小説とは、明治四十年六月の『文芸倶楽部』の増刊号『ふた昔』に、偶然に同時発表された江

さて啄木が、釧路に到着してからであるが、列車事故についての記述は、日記や書簡などを通して全く見あたらない。果して、私生活の周辺に事実があったかどうかであるが、この二ケ月間の釧路近辺の出来事は『釧路新聞』によって知ることができる。

啄木の釧路新聞社の初出勤は、明治四十一年一月二十二日であるが、二日後の二十四日・二十五日の『釧路新聞』の雑報欄に「老人轢死をはかる」という記事が掲載されている。

この記事は、老人が列車に飛び込み、自殺を図ったというもので、実際には、ポイントメンの機転によって助かっており、轢かれてはいない。だが事故の現場は、釧路発の上り列車で、池田駅を発車して利別の構内に入ろうとするところである。『青地君』の舞台は、旭川から釧路に向う下り列車で、新得駅を出て帯広を過ぎたところである。上りと下りの違いはあるが、どちらも釧路線の帯広駅と池田駅の間の十勝平野での事故である。さらに、新聞記事の事故者の身元は秋田県とあるが、『青地君』の後半部には、ひどく容姿の悪い秋田県出身の女中さんが出てくる。また記事を全体的にみると、二十四日は、事故の瞬間から始まり中盤から事故者の身元が記され、二十五日は、ほとんど身の上話によって終っており、文章の構成も『青地君』と同じである。この記事が、啄木によって書かれたものかどうかはここでは問わないことにするが、釧路新聞社では実際上の主筆であったと言われている。また翌日の一月二十六日に、啄木は、社長に呼ばれ新聞の体裁が変ったといって大喜びされ、五円と銀側時計を貰ったという事実がある。(4)



(第三郵便物認可)

▲雑報▼

◉老人轢死をはかる

去る十六日釧路發上り二番列車が定刻より約二時間半許り遲れ池田驛を發車せしは午后九時半頃ありしが同列車が利別驛構内に進行せんとする折柄突然雪塊の如く線路に轉げ込みアハヤ轢死を遂げむとするものあり斯くと見たる同驛のポイントメン吉田和一●ある者危機一髪の際に駆付けて辛くも線路外へ引摺出し幸に無事なるを得たりしが此者は髪も白く腰曲れる老躰にて剩さへ餘程疲勞し居る樣子にて物を問へども鼻涕垂らして啜泣くのみなるより種々介抱の末漸く聞訊したるに原簿は秋田縣山本郡能代畠町番地不詳佐由利之助(六五)といふ者にて妻の某には十年前に死別れ六三郎(三六)七●(三五)の二子と共に細き煙を立て居りしが長子の六三郎は昨年一月十六日あへなくも亡き人の數に入りしより其後は家事向いや更ふ意の如くならず昨年五月に至り七郎は遂々北海道に渡り來り當釧路頓化邊の某漁場に

(以下略)

▲にはたんで炭の製る下大者ふ方組ち▲●史●多

(『釧路新聞』二十四日記事)

記者経験が生かされた名文章と思われる。

ところで通俗的な疑問であるが、実際に啄木は、列車事故の現場を見たことがあるのかどうか、『青地君』は、私生活の事実の反映か、それとも文学上の虚構の産物なのか。啄木は一体、いつ頃から列車事故に興味を持つようになったのであろう。この『青地君』の執筆動機や素材を私生活と文学の側から探り、啄木が得たもの及び今日に残したものなどについて考察してみる。

○

『青地君』の舞台は、北海道の釧路で、事故の現場は、札幌から釧路に向う途中の帯広を出た十勝の原野である。明治四十年九月八日に、北海道縦貫主幹線（函館～小樽～札幌～旭川～釧路）は完成した。[2] これは十勝の狩勝トンネルが開通して、旭川～帯広間が最終的に完工することによってであり、当日は、釧路停車場構内で華やかな式典が挙行されている。この地を初めて啄木が通過したのは、言うまでもなく、小樽日報社を退社して釧路新聞社に移るときである。明治四十一年一月十九日に啄木は、小樽中央駅で仲間と妻節子に見送られ、翌々日の二十一日に旭川駅を、釧路新聞社社長白石義郎とともに釧路に向けて出発した。つまり啄木が、釧路に入ったときは鉄道の大ブームで、在釧中の二ケ月間の『釧路新聞』には鉄道の記事が二十数ケ所もある。当時は、旭川から釧路まで列車で十五時間程かかったが、この時の様子は、一月二十日頃に執筆され、一月二十四日・二十五日の両日に『釧路新聞』に掲載された紀行文「雪中行」（第一信・第二信）によってわかる。その第一信は、白石義郎と汽車に乗り込んだところから始まり、啄木は〈汽笛の鳴る迄を先生は汽車衝突の話をされる〉と言い、そして〈汽車に乗つたから汽車衝突の話をするとは誠にうまい事と自分はひそかに考へた〉と記している。さらに〈衝突なり雪埋なり、何かしらこんどの旅行記を賑はすべき事件が、釧路まで行くうちに起つて呉れゝばよいがと、人に知らされぬ危険な事を思ふ〉と妙な期待を抱いている。この汽車は、吹雪に巻き込まれ遅れはしたが、期待した列車衝突ということはなかった。

また啄木は、函館で「辻」という詩を書き、四辻に行き交う人々と人生を作品化しているが、[3] 第二信の「雪中行」には、旭川の四辻の風景を書いた場面がある。それは、

> さる四辻で、一人の巡査が恰も立坊の如く立つて居た。其周囲を一疋の子犬がグル〳〵と廻つて頻りに巡査の顔を見て居るのを、何だか面白いと思つた。知らぬ土地へ来て道を聞くには、女、殊に若い女に訊くに限る。

という描写である。その風景の素材は、四辻に立つ巡査、周囲をうろうろする犬、若い女であるが、このことについては後述するとして、取り敢えず、北海道で啄木は「四辻」に対して、非常に興味を持ったらしいことを指摘しておく。

見るも無惨だ。奈何轢かれたものか、両脚が大腿部から失くなつて、古洋服を着てゐるが、穢いものが左の腹から喰出してゐる。右の腕も臂から下が無い。頭もやられたらしく、髯面が半分血だらけだ。

このように轢死事故の瞬間、両脚から腹、腕、頭など、列車によって轢き裂かれた無惨な肉体が詳細に書かれている。引き続き、事故現場に集まって来た人々など周囲の状況が描かれる。

見る人も、見る人も、ヤアと言つた限、二の句が出ない。所がだ、其処へ印半纏を着た若い男が駆けつけて来て、一目見るなり、（ヤア此ア内のお客さんだ！）と叫んで、突然死骸の傍へ寄つて顔を覗く様にしたが、（然うだ、然うだ、お客さんだ、青地さんだ！）と、おツ魂消た様に喚いた。

其処へ巡査も来た。医者も来た。機関士の話では、故意に飛込んだのらしいと言ふ事であつたが、医者は、大分酩酊してゐた事は明かだと言ふ。故意か過失か、僕には青地君自身の性格の解らなかつた如く、解りかねる。

事故に動転する人々、取り巻く関係者の会話による事故の検証など、実にシリアスである。そして『青地君』の轢死場面の最後は、次のようなものとなっている。

軈て死骸は、其辺から集めた血だらけの脚や鳥打帽などと共に、戸板に載せて運び去られた。青地君の着てゐた洋服は、君、怎やら渠が此釧路にゐた時分に着てゐたのと、同じ物らしかつた。と言つたら君は、それが如何に見窄らしく汚なく、古びてゐたかを想像し得るだらう。五分刈の頭、顔の半分を埋めた真黒な髯、彼の時分と変りはないが、それが唯、血糊に汚れてゐた。愛嬌のあつた彼の眼も血に閉ざさてゐた。……幾何詳しく書いても、兎ても彼の無惨な死態を、君に髣髴せしめる事は出来なからう。処は荒涼たる十勝原野の中央。

軈て発車したが、二等室に唯四人、洋燈は妙に薄暗く点つてゐた。目を瞑れば鮮々と死骸が見える。

この『青地君』に於ける列車事故の描写――鋭い汽笛、停車した瞬間、乗客の反応、車掌や機関士、轢き裂かれ横たわる無惨な肉体、周囲の人々、駆けつけて来た巡査や医者、それらによる事故の検証、運び去られた後、生前の面影と死骸など、その描写は生々しく凄じい迫力である。もちろん描写と言っても、人物の心理葛藤を書く内面描写ではなく、新聞記者やルポライターなどによる現場取材の調査報告というスタイルを基礎に置いたものである。この成功は、書簡体の小説形式によってなされたとも言えようが、事実を見つめ記述する確さからの轢死事故現場の再現であり、やはり、啄木の新聞

一二

近代作家の記者体験

――啄木「轢死事件」――

伊藤淑人

啄木に『青地君』(『刑余の叔父外拾壱編』所収)という中絶した小説の草稿があり、これは北海道から上京した直後に書かれた『菊地君』(明41・5稿未発表)の姉妹品で、内容は轢死事故を扱ったものである。日記から[1]は、『菊地君』執筆の約五ケ月後にあたる明治四十一年十月六日に構想を練り、次ぐ七日から九日までに執筆されたことがわかる。この『青地君』の舞台は北海道で、友人からの手紙によって旧知の青地常象の轢死と事故現場の模様が知らされ、続いて、生前の青地君の容姿風貌と人間性が回想的に語られていくという構成となっている。

それは手紙の書き手であるK氏が、札幌から釧路に向かう途中の列車で事故にあったという設定で始まり、次のように事故現場が報告されている。

ガタリと響を打つて動ぎ出した瀘車が、一号ポイントの処で緩く逶つて、徐々速力を出しかけると、短い鋭い汽笛が、五六度続け様に恐慌しく鳴つた。驚破と許りに乗客が皆窓を開ける。間もなく停車したので、僕は真先に車外に飛び出した。列車ボーイが何とか叫んで制めたけれど、其麼事で引込む僕の好事心ではない。憚ン乍ら僕は、同じ様な経験を二三度積んでゐるので、残置ぼりを喰ふ心配は無いと知つてるから、一目散に車掌や機関士の跟を追駆けた。案の如く轢死人があつたので、場所は最後の車台から四五十間後、細い田圃路の踏切になつてる辺だ。駅員が五六人、僕らよりも先に駆付けた。その後からも、僕らの後からも、ゾロ〳〵と人が来た。死骸は、線路外の桑畑の垣の根に抛出されてゐた。

冒頭で、突然の列車事故に於ける自分及び乗客と乗務員の様子をドキュメントタッチで綴り、さらに筆は、事故者の張り裂けた肉体にまで及ぶ。